# Cure to Care　第４話

與儀　達朗

# 【登場人物】第4話

町田　翼（32）：救急・訪問診療医

鈴木　舞（32）：訪問看護師

村井　正和（50）（48）：訪問診療所院長

五十嵐　隼人（28）（25）：訪問診療所アシスタント

金城　恵（36）：訪問診療所アシスタント

山崎　香織（55）：居宅ケアマネージャー

我那覇　さくら（28）：有料老人ホーム花の看護師

新井　亮（29）：町田の後輩の救急医

窪田　航（44）：五十嵐の元職場の救急医

松永　苑子（75）：在宅患者

松永　薫（45）：苑子の娘

黒田　直哉（55）：在宅患者

阿川　卓（75）：ファミレスの客

阿川　夏子（70）：阿川の妻

石田　達也（26）：ファミレスの客

高橋　卓也（29）：訪問診療所医師

白井（26）：有料老人ホーム花の看護師

赤井（32）：訪問看護師

伊藤（30）：五十嵐の元職場の看護師

松井（30）五十嵐の元職場の看護師

太田（55）：五十嵐の元職場の救急部長

今井（40）：窪田の後任の救急医

患者A（75）：救急搬送患者

患者B（75）：救急搬送患者

釣り人（60）：河川敷の釣り人

店員（20）：ファミレス店員

【あらすじ】（第４話）

独り立ちした町田は、診療所職員の金城や五十嵐とともに診療業務をこなしていく。

診療中に五十嵐が放った「俺は採血がとれません」という言葉に妙に引っかかる町田。町田は村井や鈴木舞から、五十嵐の過去を徐々に知っていく。

ある日、患者の急変対応を五十嵐と行う町田。五十嵐の機転の利いた行動で患者の蘇生のヒントを得ることができた町田は、偶然にも、かつての五十嵐の恩師が掛けた言葉を、彼に贈るのだった。

第４話　「コンプレックス」

○港・防波堤

快晴。海鳥の鳴き声が聞こえる。

防波堤に釣竿をもって横並びで座っている町田翼（３２）と五十嵐隼人（２８）。町田の竿がヒットし、リールを巻くが、獲物に逃げられてしまう。町田は悔しそうな表情を浮かべる。

町田「逃げられたな……」

五十嵐「次ですよ、次」

一旦釣竿を地面に置く町田と五十嵐。

一瞬吹いた海風が体にあたり、思わず寒がる町田。五十嵐が水筒から注いだ温かいお茶を町田に手渡す。

町田「ありがとう。気が利くね、五十嵐くん」

五十嵐「そんなことないですよ」

町田が恥ずかしそうにしている五十嵐を軽くからかっている。再び釣竿を手に海の方をみる町田と五十嵐。

町田「全然釣れないね……」

五十嵐「ですね……今日は引き上げますか」

○五十嵐宅・居間（夜）

玄関の扉が開く音。町田が綺麗に整理整頓された居間に入り、買ってきた缶ビールを机の横に置く。

五十嵐が熱々の鍋を持ってきて、机の上の鍋敷に置き蓋を開ける。鍋の中を見て笑顔の町田。

町田「美味そう……」

五十嵐「まあ、肝心の魚は店で買いましたけどね」

缶ビールのプルタブを開けて乾杯し鍋を食べ始める町田と五十嵐。

町田が缶ビールを飲みながら直橋で鍋を突いているのに対して、五十嵐はグラスにビールを注いで飲み、取り箸を使っている。

町田「そういえば、五十嵐くんの前の職場、

救命センターだったの？」

五十嵐「そうですね」

町田が鍋をよそっている。

町田「どこの救命センター？」

五十嵐「県外の青葉救命センターってとこです」

町田「青葉……。確かドクターカーが有名な病院だったような」

五十嵐「よくご存知ですね」

町田「前学会かなんかで聞いた気がして」

缶ビールを飲み干す町田。

町田「五十嵐くんも乗っていたの？」

五十嵐「ええ……」

○同・台所（夜）

冷蔵庫の中を探し、中華麺を取り出す五十嵐。

○同・居間（夜）

綺麗に整理・整頓された机の上には、

数多くの医学書や看護学書などが揃って並んでいる。机の上に飾られている一枚の写真が町田の目に留まる。写真にはドクターカーのユニフォームを着ている五十嵐隼人（２５）と窪田航（４４）が二人笑顔で写っている。

五十嵐「先生、締めは麺とかでいいですか？」

居間に戻ってきた五十嵐は町田が写真を手に取っている事に気付く。

五十嵐「窪田先生っていう、僕にいろいろと教えてくれた人です」

町田「そうなんだ」

五十嵐「二年前に救命センターを辞めて、地元に戻りました」

町田「二年前？」

五十嵐「そうです」

町田「確か五十嵐くんも大体同じ時期に、うちのクリニックに来てない？」

五十嵐「まあ……」

町田のポケットに入っているスマホに

着信が鳴る。

町田「ごめん」

電話に出る町田。

町田「もしもし、新井か」

町田「今から？　流石に遅いから遠慮してとくわ……ドクターカー独り立ちしたんやね。おめでとう」

鍋に麺を入れている五十嵐の箸の動きが一瞬止まる。何かを考えている表情の五十嵐。

○村井訪問診療所・外観（朝）

村井訪問診療所の看板が立っている。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

村井正和（５０）が椅子に座っている。

出勤した町田がオフィスに入ってくる。

町田「おはようございます」

村井「おはよう」

出勤した金城恵（３６）と五十嵐もオ

フィスに入ってくる。

村井「町田先生、ちょっときてくれる？」

町田「はい」

町田は席を立ち上がり、村井のデスクの前に移動する。

村井「土日は休めた？」

町田「おかげさまで」

村井「そうか、よかった」

村井はうなずき、デスクの引き出しから名札を取り出して町田に手渡す。

村井「これ渡すのを忘れていた。今日から独り立ちだよね、頑張って」

名札を受け取りうなずく町田。名札をみると「村井訪問診療所　医師　町田翼」とポップな字体で書かれている。

軽く笑いながら村井を見る町田。

町田「金城さんのやつもそうだったんですけど、うちの名札って何か女子高生が書いた感じですね」

村井「……そうか？」

村井の表情全体は穏やかに笑っている様だが、目元は無表情に見える。

○車内・後部座席（朝）

金城が運転している。後部座席でノートパソコンを開いてやや緊張な面持ちで電子カルテを見ている町田。バックミラーで町田の方を見る金城。

金城「緊張してる？」

町田「まぁ今日から独り立ちなんで……」

○車・外観（朝）

赤信号で停車する車。

○車内・後部座席（朝）

金城が診療バッグから手紙を取り出し、後部座席の町田に手渡す。町田が手紙を受け取る。

町田「これって……」

金城「土曜日に、院長と金田さんのお看取り

に行ってきたんだけどね」

＊＊＊

（フラッシュ）

町田「京子さん、鼻の管を入れるという決断は本当に辛かったと思います」

涙を流し始める京子。

町田「でも、お母さんにはもう必要ないんじゃないですか？」

＊＊＊

金城「開けてみたら？」

手紙を広げると、頭には「村井訪問診療所　町田翼　先生」最後に「金田京子」と書かれてある。手紙を読み始める町田。手紙には町田へ向けた感謝の言葉が綴ってある。文面をみて町田の緊張の面持ちが徐々に和らいでいく。

○黒田宅・居間（朝）

車椅子にだるそうに座っている黒田直哉（５５）。やや心配そうな表情を浮かべて黒田の体温を測っている金城。

町田「村井先生から引き継ぎとなりました町田です、宜しくお願いします」

黒田が町田の方を見る。

黒田「村井先生に比べて若いな……まぁ宜しく頼むわ……今朝から少しだるいんだ」

体温計の音が鳴り「３８度５分」と表記されている。

金城「黒田さん、熱あるじゃない」

町田「何か他に症状ありますか？」

黒田「まぁ腰が少し痛い気はするかな」

町田が黒田の腰を診察している。

町田「もしかしたらおしっこの感染症かもしれません。念のために血液検査と尿検査をしましょう」

黒田「先生に任せるよ」

町田はうなずき金城の方に目をやる。

町田「金城さん、採血と尿検査お願いしてい

いですか？」

金城がうなずく。立って金城の元に歩み寄る町田。

町田「検査結果と状態次第で、特指示で抗生物質の投与も考えています」

金城「いいんじゃない」

町田を感心したような表情で見る金城。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

診療を終えてオフィスへ入ってくる町田と金城の二人。すでに戻っていた村井と五十嵐が席について、書類仕事をしている。

金城「ただいま」

五十嵐「おかえりなさい」

村井が席に着こうとしている町田の方を見る。

村井「どうだった、独り立ちの初日は？」

町田「緊張しましたけど、何とかって感じでした」

金城「町田先生、しっかりしていて初日とは
全然思わなかった」
村井「すごいじゃん、町田先生」
町田「金城さん、褒めすぎですよ」
恥ずかしい表情を浮かべる町田。
村井「明日は逆のペアで行ってみようか」
五十嵐が町田先生の方を見る。
五十嵐「町田先生、宜しくお願いします」
町田「よろしく」

○松永宅・玄関先（朝）
晴れ模様の空。蜂が玄関先の花に止まっている。玄関先に立っている町田と五十嵐。町田が玄関前のインターホンを押す。
町田「村井訪問診療所です」
薫（声）「どうぞ」
玄関の扉を開ける町田。玄関には何足か靴が置かれている。玄関に現れるマスク姿の松永薫（４５）。

町田「はじめまして、村井訪問診療所から来ました医師の町田と申します」

五十嵐「アシスタントの五十嵐です」

薫「お待ちしていました」

軽く会釈し、家の中に入る町田と五十嵐の二人。

○同・居間（朝）

居間には机と椅子があり、在宅患者の松永苑子（７５）、居宅ケアマネージャーの山﨑香織（５５）が座っている。

町田に気付く山﨑。

山﨑「町田先生、久しぶりね」

町田は山﨑の方へ思わず目をやる。

町田「お久しぶりです、山﨑さん」

山﨑が席から立ち上がり、立っている町田のそばに寄って小声で囁く。

山﨑「今日の人生会議、頼むわよ」

山﨑が町田のお尻を叩く。山﨑は表情が若干歪んでいる町田を見て、席に戻

る。

苑子「知り合いなの？」

山﨑「ええ。ご存知だとは思いますけど、この世界は本当に狭いですよね」

苑子を見て、山﨑がにっこり笑う。

苑子が頷く。薫に促されて席に座る町田、五十嵐。

町田「村井訪問診療所から来ました主治医の町田翼です」

苑子に向かって会釈する町田。苑子も町田をみて会釈する。

町田「さっそくですが、苑子さんは慢性的に膝が悪くて、徐々に筋力も落ちてきて通院が困難――」

苑子、薫、山﨑と会話している町田。

一旦会話が終わる。

町田「苑子さんは、何とか庭の園芸をしたい。でも寝たきりになるくらいなら、延命はしたくないということですね。最近筋力も落ちてきているのが気がかりだと。そうであ

れば、心肺停止時の蘇生処置や人工呼吸器などの長期治療は、苑子さんに向いていないかもしれませんね」

苑子「人生会議ってやつね、懐かしいわ。先生の意見と同じよ」

山﨑が町田の発言に感心した表情を浮かべている。

山﨑「苑子さんのサービス調整は任せて。それとこれが前のお医者さんからの紹介状」

山﨑が町田に紹介状が入った封筒を手渡す。町田は前医からの手書きの診療情報提供書をみるが、走り書きで解読が困難とわかり、顔を曇らせる。

町田「そういえば、前のお医者さんからもらっていた薬ってありますか？」

苑子「痛み止めと、なんかあったけ？」

薫「痛み止めと血圧の薬くらいよね」

町田「何かアレルギーとかはありますか？」

苑子「アレルギーはないけど……」

口を覆って咳をしている薫は市販の

解熱鎮痛薬の錠剤を取り出し、さっと水で飲んでいる。町田は電子カルテの画面を見ており気づいていない。

薫「母が昔喘息を起こしたことがあって、痛み止めに注意してくださいって」

町田「そうなんですね」

○同・玄関先（朝）

晴れ模様だった空は曇りがかっている。町田と五十嵐、山﨑が玄関先に立っている。町田が玄関先に立っている薫に軽く会釈する。

町田「お邪魔しました、これから宜しくお願いします」

玄関先に足早に現れる訪問看護師の赤井（32）。

赤井「すいません、遅れました」

山﨑「急患対応大丈夫だったの？」

赤井「なんとか」

山﨑が立っている町田と五十嵐の二人

を手のひらで指し示す。

山﨑「主治医の町田先生、救命士でアシスタントの五十嵐さんよ」

赤井をみて会釈する町田と五十嵐の二人。赤井も町田と五十嵐の方に軽く会釈し、薫の方をみて頭を下げる。

赤井「すいません、遅れてしまって。訪問看護師の赤井です」

薫「いえいえ、どうぞ」

薫は赤井を中に招き入れる。

○車・外観（朝）

後部座席の扉を開けて車に乗り込もうとする町田だが、ふと何かを思ったのか五十嵐に声をかける。

町田「あ、忘れていた。痛み止めの調整のためにに一応採血取っておこうかな……」

五十嵐「さっきの訪問看護師の赤井さんにお願いしてきますね」

町田「ごめんね、五十嵐くん」

五十嵐は診療バッグから採血スピッツを取り出して玄関先に向かっていく。

○松永宅・玄関（朝）

玄関を開ける五十嵐。居間から赤井が現れる。玄関の上り框を境に、向かい合っている五十嵐と赤井。

赤井「どうしました？」

五十嵐「すいません、さっき採血忘れていて。お願いできますか？」

採血スピッツを赤井に見せる五十嵐。

五十嵐が手にしている採血スピッツを見る赤井。

赤井「町田先生の指示？」

五十嵐「はい」

五十嵐から採血スピッツを受け取る赤井。

五十嵐「ありがとうございます。あと苑子さん何か喘息の既往があるみたいで痛み止めに注意が必要だと――」

赤井「貴重な情報ありがとう。看護師で聞いておくから大丈夫」

赤井は五十嵐の居間に戻る素振りを見せるが、一瞬立ち止まって玄関の五十嵐の方を見る。

赤井「そういえば五十嵐さんは救命士だから採血できないんですよね」

五十嵐の表情が曇る。

○（回想はじめ　二年半前）青葉救命センター

五十嵐が浮かない表情をして立っている。五十嵐の前には、救命センター看護師の伊藤（３０）と松井（３０）が立っている。伊藤と松井が五十嵐に何か言葉をかけている。

（回想終わり）

○車・外観（朝）

浮かない表情で戻ってくる五十嵐。

町田が声をかける。

町田「どうだった？」

五十嵐「頼めました……」

五十嵐の表情を訝しく思う町田。

町田「なんかあったの？」

町田の顔を見る五十嵐。

五十嵐「町田先生、僕は採血が取れません、すいません……」

町田は、五十嵐の唐突な発言に驚くが五十嵐の目の奥に何か抱えているものを感じ取る。

町田「どうしたの、五十嵐くん？」

五十嵐「いや何でもないです、次いきましょう」

五十嵐が運転席のドアを開けて車に乗り込む。腑に落ちない表情で後部座席のドアを開けて車に乗り込む町田。

○村井訪問診療所・オフィス（夜）

町田が書類仕事を終えて席を立つ。

座って作業をしている村井に声をかける。

町田「院長、お疲れ様でした」

村井「お疲れ様」

既に帰宅している五十嵐の席を見つめている町田。

町田「院長ちょっといいですか？」

書類に目をやっていた村井は顔をあげて町田を見る。

○同・応接室（夜）

応接室のソファーに座っている町田。

コーヒーを淹れてきた村井は、ソファーに座って町田の前にコーヒーを置く。

村井を見て軽く会釈する町田。

村井「町田先生、どうかした？」

町田「実は……ちょっと伺いたい事があって」

村井「診療のこと？」

町田「いや五十嵐くんのことで……」

村井「五十嵐くん？」

町田「実は……」

何やら話している町田と村井。

村井「五十嵐くんがそんな事言っていたんだ」

町田「あの時の五十嵐くんの目が、何かを抱えているような気がして……」

町田「院長は五十嵐くんの過去何か知っていますか？」

村井が立ち上がって窓の方を見ている。

村井「僕も彼の過去は知らない。まあ、初めての出会いはファミレスだったけどね」

町田「ファミレス？」

○（回想はじめ　三年前）青葉救命センター・カンファレンス室（朝）

T「三年前」

救急部長の太田（５５）と緊張した面持ちで横に立っている五十嵐隼人（２５）。太田が椅子に座って電子カルテを見ている窪田航（４４）に声をかける。

太田「窪田先生」

窪田「どうしました部長？」

横の五十嵐を手のひらで示す太田。

太田「今日から院内救命士として来てくれた五十嵐くん。彼ドクターカーに興味あって青葉に入職してくれてね。いろいろ教えてあげてもらっていい？」

五十嵐「五十嵐隼人です、宜しくお願いします」

窪田に深く頭を下げる五十嵐。

窪田が五十嵐の姿を見ている。

〇同・廊下

歩いてくる窪田に五十嵐が声をかける。

五十嵐「窪田先生、宜しくお願いします」

五十嵐「ドクターカーは医師と一緒に働ける貴重な機会なので、医学的なこと色々と教えてください」

窪田「教えてください？」

窪田「最初に言っとくが、俺は受け身のやつ

が嫌いだ。乗る資格がないのなら、すぐに降りてもらう」

厳しい表情で五十嵐を見て、去っていく窪田。窪田の後ろ姿を見ている五十嵐。

○救急車・車内

窪田が心肺停止の患者A（75）に換気を実施しながら、静脈路確保中の五十嵐に何か指示を出している。五十嵐は静脈路確保を断念して、焦った表情をしながら救急バッグの中を探しているが、探しているものは見つからない。その様子を険しい表情で見ている窪田。

○公立図書館・自習室

薬学や救急に関する医学書が机の上に積み上がっている。ノートにまとめている五十嵐。

○青葉救命センター・カンファレンス室（夜）

点滴のシミュレーターを使いながら静脈路確保の練習をしている五十嵐。ドアの外からその姿を窪田が見ているがうまくいかない様子を見て、窪田が部屋に入ってくる。驚いた表情を見せる五十嵐に、静脈路確保の指導を始める窪田。

○救急車・車内

心肺停止の患者B（75）に挿管を完了して足元を見ている窪田。静脈路確保に難渋している五十嵐。曇った表情で下を向いた窪田だったが、視界に骨髄針が入る。骨髄針を持っている五十嵐が立っている。窪田はうなずき、骨髄針を受け取り患者の足元にまわる。足元には既に薬剤や静脈路のセットが準備されている。窪田は感心した表情を浮かべながら頭側で換気をしている

五十嵐に目をやる。

○青葉救命センター・屋上

屋上に立っている窪田。屋上のドアを開けて入ってくる五十嵐。

五十嵐「窪田先生、話があるって聞きました」

窪田「五十嵐」

窪田が五十嵐に缶コーヒーを渡し、五十嵐は窪田を見て軽く会釈する。窪田と五十嵐はベンチに座る。

窪田「もうすぐ半年か、ドクターカー乗って。正直どう？」

五十嵐「徐々には慣れてきましたけど……静脈路取るのは一度も成功した事ないです」

下を向いている五十嵐を見て窪田が軽く笑うが、真剣な表情に戻る。

窪田「もう太田部長には伝えているんだけど、家庭の事情で俺は来月退職することになった」

驚いた表情を見せる五十嵐。

（回想終わり）

○有料老人ホーム花・居間

洗い場で物品を洗っている施設看護師の我那覇さくら（２８）。横に町田が立っている。

我那覇「五十嵐くんのことですか？」

町田「前の救命センターのこととか……」

我那覇「五十嵐くん、高校卒業してからは県外に出ていたから、私も分からないですね」

町田「そうなんだ……」

洗い物の手を止める我那覇。

我那覇「ただあの人なら分かるかもしれない」

町田「あの人？」

我那覇「五十嵐くんが二年前、こっちに戻ってきた時くらいに確か訪問看護師の鈴木……」

町田「鈴木舞？」

我那覇「そうです、その人です」

我那覇「確か訪問診療について色々教えても

らったり、ちょこちょこ飲みにも行ったりしたって」

施設看護師の白井（２６）が浮かない表情をしながら、保留中の子機を片手に我那覇に近づいてくる。

白井「我那覇さん、往診いらないんじゃないかって……」

我那覇「また？　代わるわ」

我那覇が洗い物の手を止めて、少し不満そうな表情をしながら白井から子機を受け取る。

我那覇「もしかしたら五十嵐くんの過去とか知っているかもしれません」

町田「ありがとう」

町田に軽く会釈して、白井と一緒にその場を離れる我那覇。

○居酒屋・カウンター（夜）

町田と訪問看護師の鈴木舞（３０）が横並びで座っている。舞の前にはノン

アルコールビールの瓶が置かれている。

舞「五十嵐くんの過去？」

町田「鈴木なら何か知っているかなと思って」

舞「彼が訪問診療のアシスタント始めたのが大体二年前だったと思うけど……訪問看護の仕組みとか勉強しても分からないことあるから教えてくださいって」

町田「なんでまた鈴木？」

舞「金城さんは子供のことで早く帰らないといけなかったり、他の看護師は冷たかったって。まあ年が近くて聞きやすかったのもあるとは思うけど」

舞がお通しに手をつけている。

舞「ある日飲みに行ったんだけど、五十嵐くん、酔っ払っていて愚痴こぼしていた」

舞「前の職場の看護師さんに、採血や点滴ができないからって嫌がらせ受けたって……」

町田「そうだったんだ……」

机の上に置いていた舞のスマホに着信の表示がされる。

舞「ごめん、電話でてくる」

居酒屋の外に出ていく舞。町田がジョッキに入っている生ビールを何とも言えない表情で飲んでいる。足早に外から戻ってくる舞。

舞「ごめん、呼ばれちゃった」

舞がカバンから財布を取り出してお金を出そうとするが、それを制する町田。

町田「いいよ、頑張って」

舞「ごめんね、ありがとう」

舞が荷物を持って外に出ていく。

何か考えている表情をしている町田。

○黒田宅・居間（朝）

淡々と黒田の体温や血圧を測定する五十嵐。町田の方をみる黒田。

黒田「おかげで良くなったよ、先生ありがとうな」

町田「よかったです、お薬ってどれくらい残っていましたっけ？」

黒田「薬？　ちょっと待ってな……」

車椅子を移動させようとする黒田。

五十嵐「これですかね？」

黒田に薬の入った袋を見せる五十嵐。

黒田「そう、それ」

黒田に代わって、既に机の上に残薬を出して数えはじめる五十嵐。

黒田「サンキュー、助かるわ」

五十嵐の姿を見ている町田。

○車内・後部座席

五十嵐が車を運転している。後部座席に座っている町田。バックミラーで町田の姿を見る五十嵐。

五十嵐「町田先生、お昼ですけどどうします？」

しばらく考えている町田。

町田「弁当買って、どっか見晴らし良い所で食べるのとかどう？」

町田の意外な申し出に驚く五十嵐。

五十嵐「いつも定食屋だと思っていました」
町田「たまにはいいかなって」
町田は軽く笑いながら運転席の五十嵐を見る。

○河川敷・堤防
堤防に座って弁当を食べている町田と五十嵐の二人。釣り人（６０）が魚を釣って喜んでいる。その光景を見ている町田と五十嵐の二人。
町田「なんか釣れているね」
五十嵐「ですね」
町田「なんかコツとかあるのかな……」
五十嵐「魚への関心じゃないですか？」
釣り談義で盛り上がっている町田と五十嵐の二人。会話が一旦終わり、五十嵐の目を真剣な表情で見る町田。
町田「五十嵐くん、青葉救命センターで点滴や採血ができないからって看護師に嫌がらせ受けたんだって？」

五十嵐「どうしてそれを？」
町田「鈴木から聞いた」
五十嵐「鈴木さん……」
五十嵐の表情が曇り、下を向いている。
（回想はじめ　二年半前）○青葉救命センター・廊下
T「二年半前」
廊下を歩いている五十嵐。
伊藤と松井が立ち話をしている。
廊下の角で立ち止まる五十嵐。
伊藤「窪田先生、やめるらしいよ」
松井「それやばくない？」
伊藤「後任は、今井先生になるかもって」
松井「結果主義の？」
伊藤「そう。私苦手」
松井「それはそうと、窪田先生のお気に入りの救命士いるじゃん」
伊藤「五十嵐でしょ。噂ではドクターカーで一度も静脈路取れたことないらしいよ」

松井「それやばくない？　今井先生だったら業務から外すかもね」

伊藤「ドクターカー乗れなかったら五十嵐って、仕事ないんじゃない？」

意地悪そうな表情を浮かべて笑っている松井と伊藤。黙って二人の会話を聞いている五十嵐。

○同・カンファレンス室

五十嵐が立っている。机に座って書類を見ている今井（４０）。今井が立っている五十嵐を見上げる。今井は首から「医長　今井」と書かれているネームプレートを下げている。

今井「五十嵐、かなりの件数出動しているみたいだな」

今井を見て軽く会釈する五十嵐。

今井「静脈路の成功の機会が一度もないんだって？」

五十嵐「そうですね……」

見ていた書類を机の上に置き、頭を抱える今井。

今井「なあ五十嵐。しばらく内勤で看護師の業務補助につくっていうのはどうだ？」

五十嵐「内勤ですか？」

今井「看護師の手技を間近に見る良い機会にもなると思う」

今井「今は看護師が人員不足でドクターカーに乗ることができない。静脈路確保の成功経験がある救命士を俺としては優先させたい。すまない」

五十嵐「……わかりました」

○同・初療室

歩いている五十嵐。正面から、伊藤と松井が歩いてやってくる。

伊藤「五十嵐くん」

五十嵐「はい？」

松井「これ患者家族に説明しておいて」

五十嵐に入院患者用のパンフレットの

束を渡す松井。

五十嵐「こんなに……」

伊藤「あと経過ベッドのシーツ交換もお願いね」

表情が曇っている五十嵐。

松井「なんか言いたいことあるの？」

五十嵐「これ僕がやるんですか……」

伊藤「じゃあ、五十嵐くんは採血と点滴とか取れるの？」

伊藤と松井が意地悪そうな表情を浮かべて、顔を見合わせる。

五十嵐「できないです……」

伊藤「五十嵐くん、救命士だもんね」

松井「私たちは五十嵐くんに仕事見つけてあげているの」

伊藤と松井が去っていく。

○同・看護師控室

伊藤と松井が椅子に座っている。複数の弁当を抱えている五十嵐。伊藤

と松井に軽く会釈する。

五十嵐「買ってきました」

伊藤「そこ置いといて」

買ってきた弁当を机の上に置く五十嵐。

五十嵐「あの、伊藤さん」

伊藤「なに？」

五十嵐「休憩中に申し訳ないのですが、静脈路を取るコツを教えて欲しくて。シミュレーターでは最近は成功するんですけどーー」

伊藤「知らない、センスじゃないの？」

松井「五十嵐くん、静脈路取れないのならこの職場に向いていないんじゃない？」

悔しそうな表情を浮かべる五十嵐。

○同・初療室

五十嵐が入り口に立っている。伊藤が点滴を持って初療室に入っていく。初療室から出てきた松井に五十嵐が声をかける。

五十嵐「松井さん、何か僕に手伝えることはないですか？」

松井「そこの物品片付けといて」

松井が散乱している挿管用品を指し示す。

五十嵐「わかりました」

伊藤「五十嵐くん、邪魔」

初療室から出てきた伊藤が、五十嵐を押し退ける。

五十嵐「すいません」

伊藤「できることがないなら、ここに立たないで」

五十嵐「すいません……」

○青葉救命センター・部長室

退職届を太田に手渡す五十嵐。太田は驚いた表情をみせるが、五十嵐は太田に頭を下げて、部長室を出ていく。

（回想終わり）

○河川敷・堤防

座っている町田と五十嵐の後ろ姿。

町田「当時の状況は俺にはわからないけど、看護師の中にはそういうマウントを取る連中もいるよな、残念だけど」

五十嵐「採血や静脈路を取れるのって、やっぱり医療者として、僕は羨ましいです」

釣り人が違う種類の魚を釣り上げて喜んでいる。

町田「五十嵐くんは、日本の市場にどれくらいの数の魚が並ぶか知っている？」

五十嵐「数ですか？」

町田「そう」

五十嵐「確か６００種類くらいだったかと」

町田「さすが、よく知っているじゃん」

町田「ただ、その中で世間一般的に知られて売れているのは、５０種類なんだって」

町田「ただ残り５５０種類の中にも、地魚だったり、料理人が良さを見極めて提供しているものだってある」

町田「院長に初めて出会った時のこと、覚えている？」

（回想はじめ　二年前）○商店街・アーケード（夕）

T「二年前」

ファミレスの看板を見つけ、中へ入っていく五十嵐。

○商店街・ファミレス店内（夕）

五十嵐がメニューを見ている。隣の席で大きな物音が鳴り、思わず目をやる五十嵐。阿川卓（７５）が仰向けに倒れている。客の石田達也（２６）が急いで駆け寄る。

石田「お客さん、大丈夫ですか？」

卓の意識と呼吸を確認して、心肺停止だと気づく石田。

石田「心停止です、誰か来てください！」

石田はすぐに心臓マッサージを始める。

村井正和（４８）が横に現れる。

村井「医者の村井です、状況は？」

石田「研修医の石田です、心停止です」

懸命に心臓マッサージを続けている石田。村井がフロアを見渡す。店員（２０）と目があう。

村井「私が１１９番をします。ＡＥＤをお願いします」

店員はうなずき、店外へ出ていく。

心臓マッサージを受けている姿を見て狼狽している妻の阿川夏子（７０）。

心臓マッサージをされている夫に駆けよって体を触る。

夏子「あなた、あなた！夫は助かるんですか？」

石田の心臓マッサージを続けている手を掴む

石田「蘇生中です、離れてください！」

夏子の手を引き剥がす石田。引き剥がされた夏子の手を取って優しくその場

から遠ざける五十嵐。

五十嵐「救命士の五十嵐と言います。安心してください、旦那さんを助けるために懸命な処置をしています」

五十嵐「処置には旦那さんの体に触れていてはできないこともあります。大丈夫ですよ、もうすぐ救急隊が来てくれます」

電話をかけている村井が五十嵐の姿を見ている。

（回想終わり）

○河川敷・堤防

座っている町田と五十嵐の後ろ姿。

町田のスマホに着信がなる。電話に出る町田。

赤井（声）「町田先生、すぐ来て欲しいです。園子さんが……」

町田「わかりました、すぐ行きます」

町田の表情をみてうなずく五十嵐。

○松永宅・居間

居間に足早に入ってくる町田と五十嵐。焦った表情を浮かべている看護師の赤井。町田が声をかける。

町田「赤井さん、どうしました？」

赤井「苑子さんが、市販の痛み止めを飲んだみたいだけど、苦しいって連絡があって。血圧が７０しかないです」

ベッドには喘鳴を伴って苦しそうに息をしている苑子が横たわっている。五十嵐が机の上に置いていた市販の解熱鎮痛薬の箱を持ってくる。箱の成分を見る町田。

町田「アスピリン喘息……」

苑子の上着を開ける。胸や腹に蕁麻疹が広がっている。苑子の手を握って脈を確かめる町田。

町田「アナフィラキシーショックか。赤井さん、アナフィラキシーショックで１１９番をお願いします」

赤井がうなずいて電話をかけ始める。
町田の視界に針が付いたアドレナリンのシリンジが入る。五十嵐は町田を見てうなずき、町田は受け取る。苑子の太ももに筋注する町田。

○大通り・車道
サイレンを鳴らして緊急走行している救急車。

○松永宅・居間
静脈路を確保し、患者の容態を確認している町田だが表情を曇らせる。
五十嵐「どうですか？」
町田「患者の状態が上がってきてない……」
五十嵐が何かを思いついた様に、赤井に声をかける。
五十嵐「患者の持参薬ってどこにありますか？」
赤井「え、こっちよ……」

指し示された棚を探し始める五十嵐。
そこにドクターカーのユニフォームを
来た新井亮（２９）が現れる。町田の
姿を見て驚く新井。

新井「先輩！」

新井「ショックだからって呼ばれましたけど
……」

町田「新井、アドレナリンを打ったが状態が
上がってこない」

町田の視界に降圧薬の袋を持った五十
嵐が現れる。

五十嵐「もしかしたらこれかも」

町田「ベータブロッカー……」

新井を見る町田。新井がうなずく。

○松永宅・玄関先

玄関先に立っている町田と五十嵐。

五十嵐「町田先生の処置や判断の速さ、在宅
で救急外来やっているみたいでした」

町田「五十嵐くんのおかげだよ。アナフィラ

キシーとベータブロッカーの関係を知っているなんて驚いた」

救急車に乗りこむ新井。後の扉が閉まって車が出発する。救急車を見送る町田と五十嵐の後ろ姿。

（回想はじめ　二年前）○商店街・アーケード（夕）

救急車に乗りこむ石田。後の扉が閉まって車が出発する。救急車を見送る五十嵐と村井の後ろ姿。

村井「患者は電気ショックが必要な状態だった。君が奥さんのケアをしてくれて本当に助かったよ」

村井の方を見る五十嵐。

村井「訪問診療所の医師の村井といいます」

五十嵐に名刺を手渡す村井。名刺を受け取る五十嵐。

五十嵐「救命士の五十嵐です」

村井「救命士なんだね。今はどこで？」

五十嵐「前働いていたところやめて、職探し中です」

村井「そうなんだ……」

一息ついて、再度五十嵐の方を見る。

村井「よかったらアシスタントとして働いてみない？」

急な申し出に驚いた表情を見せる五十嵐。

五十嵐「冗談ですよね？　だって僕は採血も点滴も取れないですよ？」

五十嵐の発言に、軽く笑う村井。

村井「大事なことって点滴や採血じゃないよ。大事なのは幅広い視野かな、今日の家族対応みたいにね」

村井「よければ、見学にでも来てよ」

五十嵐の左肩を叩いて去っていく村井。

名刺を手に握って、村井の後ろ姿を見ている五十嵐。

（回想終わり）

○松永宅・玄関先

町田「五十嵐くんは自分の良さって何だと思う？」

五十嵐「自分の良さですか？」

下を向いて考えている五十嵐。

（回想はじめ　二年半前）○青葉救命センター・屋上

ベンチに座っている窪田と五十嵐。

五十嵐「先生が辞められるなんて……残念です」

窪田「俺の後任だが、今井になる予定だ。あいつの性格考えると、五十嵐が今よりドクターカーに乗れる回数は減ってしまうかもしれない」

下を向いている五十嵐。

窪田「まあ、ドクターカーが全てではないけどな」

窪田「なぁ、五十嵐。お前は自分の良さって何だと思う？」

五十嵐「僕の良さですか？」

しばらく考えている五十嵐。

窪田が立ち上がって数歩前に歩き出す。

窪田「俺は、お前が努力家で気が利いていて、広い視野を持っているところだと思う」

五十嵐「窪田先生……」

窪田「まぁ俺が辞めても、将来必ずお前の良さを分かってくれる人がいる」

窪田は五十嵐の左肩を叩いて去っていく。

（回想終わり）

○松永宅・玄関先

五十嵐の左肩を叩く町田。

町田「五十嵐くんの良いところは、努力家で気が利いていて広い視野を持っているところだと俺は思う」

五十嵐「町田先生……」

町田「採血がとれる、とれないじゃない。五十嵐くんはもっと大事なものを持っている」

五十嵐が下を向いて涙を流している。
その姿を優しそうな表情で見ている町田。

○レストラン・玄関先

玄関先に出てくる町田と新井。新井は満腹の笑みを浮かべている。

新井「先輩、ごちそうさまでした。また休みあえば、飯行きましょうね」

町田「新井食べ過ぎだよ」

財布を見て、苦笑いの町田。

高橋「新井？」

声の方を振り向く町田と新井。

ブランド物に身を包んだ大柄な高橋卓也（２９）が立っている。

新井「高橋じゃん、久しぶり」

驚いた表情をしている新井。

町田「新井の知り合い？」

小声で新井に囁く町田。

新井「俺の初期研修の同期ですよ」

町田「そうなんだ……」

新井「あれ、高橋って俺と同じ救急専攻医じゃなかった？」

高橋「今はもう違うよ」

高橋が新井の隣にいる町田へ視線を向ける。新井が視線に気付く。

新井「俺の先輩の救急医で町田先生。今は訪問診療をしている」

高橋は軽く会釈して名刺を取り出して町田に手渡す。名刺を受け取る町田。

高橋「はじめまして、町田先生。訪問診療医の高橋卓也です」

町田が高橋の顔を見る。高橋と町田が向き合っている。

（第5話「経験」へ続く）